
世の中そんなに美味しい話はない。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世の中そんなに美味い話はない。

【Nコード】

N2866K

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

チラシでみつけたアパートを見に来た大石はあまりの家賃の安さに驚き不思議に思っただけで大家を問いただした。

大石雅夫はチラシに載っていた物件が余りに安いので部屋の中を見たくなってこのアパートにやってきたのだ。

彼は今春大学に入学するため、学校から徒歩30分以内の物件を探していた。

このアパートはそれに適合していた。

「大家さん、なんでここは……」

「部屋も綺麗でしょ、築10年ですからまだまだ傷みも少ないし」
髪为天辺が薄くなった白髪の大家前川は額の汗をハンカチで拭いた。

そして、相変わらずのマイペースぶりで続けた。

「駅からも近いし、あんたの学校までも徒歩20分程度だ、これで1万円なんだよ、破格だよ！」

「大家さん……僕の話も聞いてくださいよ、値段の安いのは分かりました。でもこの値段の安さはおかしい」

はぐらかすように大家が同じような説明を続けるので、大石は今度はずばつと言いつつてみた。

大家は苦虫を噛み潰したような顔をして一瞬間を空けると、

「……それが……いいにくいんですが……出るんですよ……」

「ほお……何がですか？ ゴキブリとか？ ペっちん虫？」

「いや、出るって行ったらあれじゃないじゃないですか？ 幽霊ですよ……」

ここまで話してしまったら、隠しようもなくしびしび最後の言葉を吐き出した。

大家は額の汗を拭うハンカチを一瞬止めて、大石の反応を見守る。

すると、大石は角張った平たい顔を綻ばせて、

「なんだ、幽霊ですか、はーん、そんな事で安くなるもんなんです

ね

と、あっけらかんと言った。

「こ、怖くないんですか……?」

「ははは、ちつとも。幽霊たつて元人間なんだから話し合えば分かりますよ」

その言葉に民夫は呆氣に取られてしばらく大口を開けていたが、

「じゃ、じゃあ契約の手続きどうします?」

「もちろん、今からお願ひします」

と言つて、一旦二人は大家の部屋へ引き揚げていった。

一週間後、大石は引越しやに頼んで、実家から荷物を送ってもらった。

次々と閑散とした6畳一間の部屋に荷物が運び込まれる。

「これで終わりです……じゃ、サインを」

「ありがとう」

引越やが帰っていくのを部屋の窓から見下ろすと大石は一息ついた。

部屋を見渡すと、家から届いた自分の勉強机は南向きの窓の傍に回転椅子とセットで置き、東向きの玄関のすぐ左の壁に本棚をしつらえた。右側には流しとコンロがある。そして、真正面には押しいれがあつた。

「はー……」

大石は畳の上で大の字になってしばらく横になっていた。

そして、夕暮れを迎えるころには、荷物の細かい物を並べていった。

それほど荷物はなかったので、あつという間に整理整頓の作業を終える。

「ふー、一通り終わったな……」

肩を叩きながら、笑顔をみせる大石。

南向きの窓の辺りに視線を置いた。

爽やかな表情はかわらないまま、じつと同じ場所を見つめていた。
「さて、そのあんた、名前は？」

誰もいない空間に声を投げかける。

大石はしばらく黙っていたが、突然、息を大きく吸うと、

「見えてるんだよ、しかとすんなや！」

と、急に憤然として怒鳴った。

『み、見えてるんですか』

「おうよ！ 名前聞いてんだから返事くらいしろ！」

青白い顔をした若い男性の幽霊は確かに大石の目に映りこんでいた。

短髪で、細面、生気のない目を大石に向けると、

『怒鳴らないでくださいよ……びっくりするじゃないですか……』

少し気圧されたのか、目に怯えの色を含んでいる。

『俺はよお無口な奴と礼儀知らずは嫌いなんだよ、そこんとこ気をつける！ お前居候の身分なんだからな』

大石は荒々しく吐き捨てた。

『居候？ てか、あなた怖くないんですか？』

「ああ、俺は靈感があるんで、いつでも幽霊の姿は見えてるんだ、慣れちゃったよ！」

言い終えると、大石はどかっと頭の後ろで腕を組んで横になった。
そして、いつの間にかぐうぐう鼾をかいて寝入ってしまった。

『こんな太い神経の人初めてだ……』

大石が目覚めると東の玄関扉にはめ込まれたガラス窓から陽射しが眩しいくらい入ってきていた。

寝ぼけ眼で周りを見渡すが、先日の幽霊の姿が見えない。

それに変な時間に寝入ってしまい、晩飯も食べていないので激しい空腹に見舞われていた。

「飯つくるか……」

『あ……』

押入れに布団をしまおうとすると、幽霊と視線があった。

「こんなとこにいやがったのか」

『すみません……』

「邪魔だ邪魔だどけ」

顔を歪めて大石は幽霊を払いのけた。

というよりは、幽霊が焦って飛びのいたといった方が正解だ。

大石は最初大家と話した雰囲気と違い、幽霊と仲よく話すつもりはないらしかった。

むしろ邪魔物扱いでないがしろにしていた。

何か話違うな……うまくやってけると思ったのに……

「トイレか！」「壁の向こうにいやがる！」「天井裏か！」

「ベッドの下だな！」

それからも事あるごとに、大石は幽霊の位置を逐一把握して見つけては怒鳴り散らした。

こそこそ隠れているのが気に食わない様子である。

『うう、こちらが脅かすどころか、俺が安らげる場所がここにはない……』

幽霊は苦悩の毎日に当等堪えきれなくなったらしく、

『僕出て行きます……』

「お、そうか、新しい旅路を応援してるぞ！」

大石は笑顔でいうと、幽霊が部屋を出たのを確認してボタンと音を立てて締めた。

「大家さんに教えてくるか……」

「ありあとあしたー！」

代金を頂いて待っていたトラックに大石は乗り込んだ。

それと入れ替わりで、やってきた本当の部屋主がああ部屋へ入っていた。

実は大石は大家さんに頼まれて幽霊を追い出すために、雇われた
霊感追いだし屋の従業員だった。

最初来た時の大家とのやり取りも幽霊が盗み聞きしていることを
知っててわざと聞こえよがしに大声で話していた。幽霊を油断させ
るためだ。そして、わざと親密なふりを思わせて実際との差異を印
象づける狙いもあった。

部屋の家具はすべて後から住む人間のものだった。

「ははは、これで3万円か軽い軽いーねー店長！」

「まあな……」

追い出し屋店長の顔がどことなく不機嫌そうだった。

「どうしたんですか？」

「お前後で、その背中についてるの被ってもらえよ！」

「あ……」

大石はその時初めて気づいた。

背中にしがみついたあの部屋の幽霊の顔が肩から伸びている事に。

「お、お前、いつの間に」

「前見た方がいいよ」

幽霊が言った時には遅かった。

少し後ろに気を取られた間に、対向車線のトラックと衝突してい
た。

二人とも即死だった。

『ざまあみろ！』

幽霊はせせら笑うと、薄暗い路地の陰に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2866k/>

世の中そんなに美味い話はない。

2010年10月8日15時08分発行